

注意事項

1. 試験問題の数は50問で解答時間は正味2時間25分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 63歳の男性。C型肝炎に罹患している。この度初めて肝右葉S6に4.0cm大の肝癌を指摘された。諸検査の結果、担当の外科医は肝予備能が良いので切除術が最適であると考えている。担当医は肝臓の手術経験が豊富であり外科学会の専門医である。

担当医の対応として適切なのはどれか。

- a 生命に危険がおよぶ合併症でもまれなものは説明を省略した。
- b 手術の成績や合併症の発生は他施設での成績を参考にしなかった。
- c 医師の裁量権を強調して手術を受けるように患者を説得した。
- d 患者が他の治療法を希望したので他の専門医に紹介した。
- e 医療事故が生じても訴えられないようにインフォームドコンセントを得た。

2 45歳の女性。1か月前に急性白血病と告知され化学療法を受けている。2週間前から抑うつ気分とともに、不眠、集中困難、興味・関心の低下および疲労感を訴えるようになった。生きていく自信もなくなったという。

対応について正しいのはどれか。

- a 支持的態度は患者を自殺に導きやすい。
- b 共感的態度で接し患者の感情表出を促す。
- c 自殺念慮を聞くと医師患者関係を損なう。
- d 治療に専念するため家族の面会を禁止する。
- e 全人的治療のためホスピスでの治療を勧める。

3 65歳の男性。3年前に胃癌と診断され、胃全摘術を受けている。半年前に再発し、現在は末期状態となっている。1か月前から食事の摂取ができなくなり、強度の背部痛を訴えている。家族から「楽にさせてあげる方法はないか。」と相談を受けた。

対応として最も適切なのはどれか。

- a 本人に死の受諾を尋ねる。
- b 身体的苦痛の除去を行う。
- c すべての治療を中止し、経過観察する。
- d 家族に死への承諾書類にサインしてもらう。
- e わずかな治癒の可能性を目指し、癌化学療法を勧める。

4 21歳の女性。上司に勧められ来院した。会社に勤務して2年目であるが、最近、仕事の能率が急に低下したと指摘されている。毎日長時間、仕事でコンピュータ画面に向かっているのが辛いという。病院で診察を受けるのは初めてとのことで、やや緊張気味である。

医療面接を円滑にするのに役立つのはどれか。

- a カルテを書きながら話を聞く。
- b 時々、視線を自分の腕時計に向ける。
- c 時々、患者が話す内容を要約する。
- d 業務内容についての質問は控える。
- e 一問一答形式で質問をする。

5 38歳の男性。草刈りをしていたところスズメバチに頸部と前腕とを刺されて来院した。局所の痛みと腫脹とを訴えていたが、気分が悪いと言ってしゃがみ込んでしまった。

可能性が低いのはどれか。

- a 意識障害
- b 呼吸困難
- c 頰脈
- d 血圧上昇
- e 皮疹

6 73歳の男性。咳嗽と血痰とを主訴に来院した。この2か月で症状は次第に増強した。来院時、呼吸数19/分。脈拍108/分、整。血圧112/76 mmHg。喀痰検査で肺癌の診断が得られた。この患者の胸部造影CT(別冊No. 1)を別に示す。

この患者にみられるのはどれか。

- a 黄疸
- b めまい
- c けいれん
- d 聴力障害
- e 顔面の浮腫

別冊
No. 1 写真

7 56歳の女性。「天罰を受けたので死ぬこともできない。」と訴えるために夫に連れられて来院した。婚家は裕福であったが、姑と長年の確執があり苦勞した。半年前にその姑が急死し、その後始末が一段落した3か月前から昼も夜も落ち着かず、体のさまざまな不調を訴えるようになった。治療を勧めても貧乏だからできないと拒否する。体重は3か月で4kg減少した。身体所見に異常を認めない。

この患者でみられない症候はどれか。

- a 妄想
- b 抑うつ
- c 食思不振
- d 睡眠障害
- e 意識障害

8 60歳の男性。全身の掻痒感を主訴に来院した。手掌と腹部との写真(別冊No. 2)を別に示す。

まず検査すべき臓器はどれか。

- a 心臓
- b 肺
- c 消化管
- d 肝臓
- e 腎臓

別冊
No. 2 写真

9 6歳の男児。頭痛と歩行時のふらつきとを主訴に来院した。1か月前から平地歩行でよく転倒するようになった。2週前から噴出するような嘔吐を時々きたすようになった。意識は清明。身長116cm、体重21kg。眼底検査で視神経乳頭の発赤と腫脹とを認める。

まず行うべき検査はどれか。

- a 血糖測定
- b 頭部エックス線単純撮影
- c 頭部単純MRI
- d 脳波
- e 腰椎穿刺

10 45歳の男性。家族との会話が少なく、顔色の悪いことに気付いた妻に伴われて来院した。仕事で重要プロジェクトに参加している。3か月前から食思不振と不眠とをきたすようになり、体重が3kg減少した。話し声は小さく、勤務中にぼんやりしていて、仕事に意欲がわかないと言っている。意識は清明。身長175cm、体重60kg。体温37.1℃。脈拍80/分、整。血圧126/70mmHg。

最も考えられるのはどれか。

- a うつ病
- b 胃潰瘍
- c 統合失調症
- d 緊張性頭痛
- e 鉄欠乏性貧血

11 78歳の女性。腹痛を主訴に他院から紹介されて来院した。生来健康で、体重減少もなく、腹部の手術歴もない。5回経産であるが婦人科的既往歴もない。8時間前から急に嘔気と腹痛とが出現した。紹介状によると、赤血球310万、Hb 11.2 g/dl、白血球8,200で、血清生化学所見には異常はなかったとのことである。最初は絞るような腹痛が間欠的にあり、吐き気がしていたが、痛みは徐々に持続性となった。最初は食べたもの、次いで苦みのある液を嘔吐するようになった。腹痛が出現して以降、排ガスはない。持参した腹部エックス線単純写真立位像には拡張した腸管ループと鏡面形成とを認める。

診断確定のために特に注意して身体診察を行うべき部位はどれか。

- a 上腹部
- b 右季肋部
- c 左側腹部
- d 腰背部
- e 鼠径部

12 眼の診察の写真(別冊No. 3A)を別に示す。

観察される左眼の像(別冊No. 3B①~⑤)はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊
No. 3 写真A、B①~⑤

13 51歳の男性。数日続く高熱と悪寒とを主訴に来院した。2週前に殿部膿瘍の切開排膿を受けた。体温39.5℃。呼吸数22/分。脈拍96/分、整。指先に有痛性の小結節を認める。呼吸音正常。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血1+。血液所見：赤血球487万、Hb 15.8 g/dl、白血球12,800(好中球76%)。

診断に重要な身体所見はどれか。

- a 心雑音
- b 背部叩打痛
- c 腸雑音低下
- d 肝下縁触知
- e 切開部硬結

14 28歳の女性。腹痛を訴えて来院した。2日前から心窩部に重苦しい痛みが出現し、嘔気があった。体温は37.4℃であった。今朝から痛みは右下腹部に移動し、我慢できないほど強くなった。階段を降りるときには、右下腹部に痛みが響く。下痢はなく、2日前に排便があった。月経は1週前に終わっている。24歳時に帝王切開で出産した。意識は清明。体温37.8℃。脈拍104/分、整。血圧136/86 mmHg。血液所見：赤血球390万、Hb 11.9 g/dl、Ht 35%、白血球18,000。

この患者で可能性が最も高いのはどれか。

- a 上腹部に暗紫色の皮下出血がみられる。
- b 心窩部の聴診で血管雑音がある。
- c 打診で仰臥位と側臥位とで濁音界が移動する。
- d 圧痛の最強点は臍と恥骨結合の midpoint である。
- e 圧痛部の痛みは押すときより急に離すときの方が強い。

15 厚生花子さん。65歳の女性。3年前から、肝機能障害と高脂血症とのために通院し、2か月ごとに血液検査を受けている。

採血担当の研修医が最初に声をかけるのに適切なのはどれか。

- a 「厚生さんですね。」
- b 「確認のため、お名前を教えてください。」
- c 「検査の説明は受けていますか。」
- d 「前回の採血のあと、紫色になることはなかったですか。」
- e 「いつもの検査です。安心してください。」

16 72歳の男性。突然の激しい腹痛を主訴に救急車で搬入された。高血圧の治療中で拍動性の腹部腫瘤を指摘されていた。意識は清明。身長168 cm、体重72 kg。脈拍116/分、整。血圧68/48 mmHg。顔貌は苦悶様。冷汗著明。血液所見：赤血球310万、Hb 10.0 g/dl、Ht 28%、白血球11,000。

確定診断に必要な検査はどれか。

- a 心電図
- b 呼吸機能検査
- c 腹部エックス線単純撮影
- d 腹部造影 CT
- e 消化管内視鏡

17 35歳の男性。夕食後に悪心があり、上腹部痛が出現してきたため来院した。身長165 cm、体重90 kg。体温37.5℃。腹部は平坦で上腹部に圧痛を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血清生化学所見：総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 35単位(基準40以下)、ALT 30単位(基準35以下)、アミラーゼ2,540単位(基準37~160)。

病変の広がりを知るのに最も有用なのはどれか。

- a 腹部超音波検査
- b 上部消化管造影
- c 腹部造影 CT
- d 上部消化管内視鏡検査
- e 内視鏡的逆行性胆管膵造影(ERCP)

18 21歳の男性。交通外傷のため救急車で搬入された。オートバイ運転中に乗用車と接触し転倒した。意識障害はない。呼吸数30/分。脈拍120/分、整。血圧80/64 mmHg。頸静脈の怒張はない。右側胸部に打撲痕と皮下気腫とを認める。右肺の呼吸音は減弱している。腹部に擦過傷を認めるが圧痛と膨隆とはない。骨盤・四肢の変形、腫脹および運動麻痺はない。

血圧低下の原因として考えられるのはどれか。

- a 頸髄損傷
- b 緊張性気胸
- c 胸腔内出血
- d 腹腔内出血
- e 消化管穿孔

19 58歳の男性。大量の鼻出血のため救急車で来院した。朝6時ころ、右鼻出血があったが10分ぐらいで自然に止血した。2時間後に再び鼻出血が始まり、今回は止まらない。口腔からも血液を吐き出している。前鼻鏡検査では上鼻道後方から多量に出血しているが、出血点は確認できない。

適切な止血法はどれか。

- a 鼻根部を冷やす。
- b 鼻翼を正中に向かい圧迫する。
- c 後鼻孔側タンポン(Bellocq タンポン)を挿入する。
- d 電気焼灼を行う。
- e 内頸動脈結紮を行う。

20 60歳の男性。「水虫の薬を右目に誤って点眼した。」と訴えて直ちに来院した。表面麻酔薬を点眼後に細隙灯顕微鏡検査で右眼の結膜充血と角膜びらんとを認める。視力は右0.7(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。

まず行うべき治療はどれか。

- a 抗菌薬点眼
- b 人工涙液点眼
- c 自己血清点眼
- d 生理食塩液で洗眼
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

21 32歳の男性。突然の吐血のため救急車で来院した。1年前から胃潰瘍と診断され内服薬を服用していたが、症状がないので10日前から自己判断で中止していた。意識は清明。脈拍104/分、整。血圧110/72 mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球378万、Hb 10.8 g/dl、Ht 32%、白血球6,200、血小板32万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン4.2 g/dl、尿素窒素25 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST 32 単位(基準40以下)、ALT 28 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ230 単位(基準260以下)、Na 138 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 102 mEq/l。

最も有用な検査はどれか。

- a 腹部超音波検査
- b 腹部エックス線単純撮影
- c 上部消化管造影
- d 腹部造影 CT
- e 上部消化管内視鏡検査

22 75歳の女性。朝からぐったりしているため、家人に伴われて来院した。15年前から糖尿病で通院中であった。1週間前から1日数回の水様の下痢が続いている。昨日は1回しか排尿がなく、今朝から口渇を訴えぐったりしている。体温36.9℃。呼吸数16/分、脈拍112/分、整。血圧92/60 mmHg。舌は乾燥。胸部聴診所見に異常を認めない。尿所見：蛋白1+、糖1+、ケトン体(-)、潜血(-)、沈渣に白血球2~3/1視野。血液所見：赤血球510万、Hb 15.3 g/dl、白血球7,200。血清生化学所見：血糖177 mg/dl、尿素窒素40 mg/dl、クレアチニン1.5 mg/dl、Na 144 mEq/l、K 3.2 mEq/l、Cl 99 mEq/l。

この患者で直ちに是正すべき病態はどれか。

- a 脱水
- b 頻脈
- c 高血糖
- d 電解質異常
- e 腎機能障害

23 9歳8か月の男児。肥満を主訴に来院した。出生歴、家族歴および既往歴に特記すべきことはない。1年前から体重の増加を認め、近医で単純性肥満症と言われ経過を観察していた。3か月前からさらに体重増加が進み、多毛と顔面紅潮とが出現した。生来おとなしい性格であったが、太りだしてから寡黙である。患児の上半身写真(別冊No. 4A)と成長曲線(別冊No. 4B)とを別に示す。

この患児の身長パターンで正しいのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別 冊
No. 4 写真A、図B

24 62歳の女性。体の痛みや全身倦怠感のために1か月前に入院した。再発乳癌で治療を受けていたが、病状が進行し緩和治療が必要になった。現在症状コントロールは良好である。最近になって「もう治療を止めてほしい。死にたい。」という発言がみられ、表情も乏しくなった。

この患者への対応として最も適切なのはどれか。

- a 患者をなるべく一人にしておく。
- b 患者の気持ちや考えを詳しく聞く。
- c 頑張るよう励ます。
- d 一旦治療を中断する。
- e 安楽死の求めに応じる。

25 68歳の男性。右半身麻痺のため救急車で来院した。高速道路を3時間運転して親族を訪問し、宴会で飲食していたが、食事中突然に箸を落とし、隣の人に寄りかかるように倒れ込んだとのことである。入院して治療を受け、右上下肢の運動麻痺はあるが意識は清明である。10日目となり、本人も家族も自宅近くでの療養を希望している。

この患者の今後の療養について、病院間の連携を直接調整するのに最もふさわしい職種はどれか。

- a 入院担当の医事課職員
- b 医療ソーシャルワーカー
- c 患者担当の理学療法士
- d 入院病棟の看護師長
- e 患者担当の研修医

26 54歳の男性。定期健康診断で空腹時血糖 250 mg/dl を指摘され来院した。1年前に糖尿病と診断され、治療の基本的知識を習得したが、糖尿病の合併症は自分には発症しないと考えているようである。会社では病気を隠して仲間としばしば飲み歩いている。

(不摂生な食生活の話医師にした後で・・・)

患者「自覚症状はありません。自分の良くない生活スタイルは分かっています。先生、何とかしたいのですが。」

医師「 (A) 」

行動変容を目指した医師の適切な応答(A)はどれか。

- a 糖尿病の初期には、自覚症状はありません。
- b 本気で生活を変える気になったら、また受診してください。
- c 自分で分かっているなら、やってみられたらどうですか。
- d このままの生活を続けると失明するかもしれませんよ。
- e ご自分の病気をどう考え、どうしたいと思っていますか。

27 68歳の男性。肺炎、高血圧症、2型糖尿病および高脂血症で1週間から入院中である。肺炎は軽快傾向であり、高血圧症は良好なコントロールが得られている。しかし、血糖値は空腹時血糖が148 mg/dl、HbA_{1c}は6.5% (基準4.3~5.8)である。同級生が脳梗塞で同じ病院に入院し、半身不随になっていることを聞いたところから怒りっぽくなり、「看護師の採血が下手だ。」とか「受け持ちの研修医の点滴が下手だ。」などと言い出した。

この患者への対応で最も適切なのはどれか。

- a 抗菌薬の点滴投与を止めて経口薬に変える。
- b 患者の怒りをなだめる。
- c 患者の不安な気持ちを聞き出す。
- d 受け持ち医を変更する。
- e 他の病院へ紹介転院させる。

28 59歳の女性。本態性高血圧症、2型糖尿病および高脂血症で通院治療中である。食事療法、運動療法および服薬に関する知識を何度も教えてきたがなかなか守れない。身長156 cm、体重65 kg。脈拍68/分、整。血圧158/102 mmHg。血清生化学所見：空腹時血糖168 mg/dl、HbA_{1c}7.2% (基準4.3~5.8)、クレアチニン0.9 mg/dl、総コレステロール252 mg/dl、トリグリセライド128 mg/dl (基準50~130)。

この患者への対応で適切なのはどれか。

- a セルフコントロールの重要性に気付かせる。
- b 正確で威厳のある言い方で再教育する。
- c 合併症の怖さを強調する。
- d 頻回受診してもらう。
- e 入院治療を行う。

29 47歳の男性。健康診断で高脂血症を指摘され2か月前に来院した。現在食事療法のみで経過観察中である。2か月前は総コレステロール310 mg/dl、トリグリセライド262 mg/dl (基準50~130)。1か月前は総コレステロール292 mg/dl、トリグリセライド215 mg/dl。今回は総コレステロール268 mg/dl、トリグリセライド185 mg/dlであった。

行動変容の観点から、適切でないのはどれか。

- a 今後とも継続診療が必要であることを説明する。
- b 患者に相応しい食事療法について話し合う。
- c 次回に向けた行動目標を明確にする。
- d データ改善に繋がった生活習慣の良い点を認める。
- e 未だに基準範囲外にいる状態を指摘する。

30 30歳の男性。禁煙を希望して来院した。喫煙歴は18歳から1日に30本。これまでも何度か禁煙を試みたが短期間で失敗している。今回、1児の父親になったことを契機に特に禁煙を希望している。身長172 cm、体重68 kg。脈拍68/分、整。血圧124/72 mmHg。

指導内容で適切でないのはどれか。

- a 灰皿の撤去
- b 禁煙宣誓書
- c 周囲の励まし
- d 喫煙本数の漸減
- e 禁煙補助薬の使用

次の文を読み、31、32の問いに答えよ。

28歳の女性。全身倦怠と食欲不振のため来院した。診察と即日検査の結果、著明な肝障害があり、医師は入院治療が必要であると判断した。その時の会話を以下に示す。

医師 「検査結果も踏まえて説明しますと、肝臓の機能が大変悪くなっているので、入院した上で安静にして治療しなくてはなりません。」

患者 「ええっ、入院？私入院はしたくありません。絶対に。」

医師 「どうしてですか。」

患者 「どうしてもだめなんです。」

医師 「分かりました。あなたが入院したくないと思っていることは分かりました。では、どうして入院したくないのかを教えてくださいませんか。」

患者 「入院できないんですよ。母が家で一人になってしまいますから。母は自分では何もできないのです。うつ病なんです。自殺するかもしれないし、とにかく一人で家に置いておけないのです。」

医師 「なるほど、お母さんのことをとても心配していらっしゃるのですね。」

患者 「そうです。」(少し涙ぐむ。)

医師 「分かりました。入院できない理由がよく分かりました。それでは、こうしたらいかがでしょう。」

(以下略)

31 この面接のときの患者と医師との会話風景写真(別冊No. 5①～⑤)を別に示す。最も適切なのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊
No. 5 写真①～⑤

32 下線部の医師の対応はどれか。

- a 尊重
- b 反映
- c 正当化
- d 協力関係
- e 個人的支援

次の文を読み、33、34の問いに答えよ。

62歳の女性。意識障害のため家族とともに来院した。

現病歴：このところ忙しく便秘気味であった。昨夕から食事中に箸を落としたり、しばらくボーッとするなど、少し様子がおかしいことに家族が気付いた。

既往歴：30歳時分娩の際に大量出血をきたし輸血を受けた。病院に行くのが嫌いなため、その後血液検査を受けたことがない。

現症：意識はやや低下している。身長157 cm、体重56 kg。体温35.8℃。脈拍80/分、整。血圧146/82 mmHg。眼球結膜に軽度の黄染を認める。胸部にくも状血管腫を認める。腹部は平坦、軟で、心窩部に肝を8 cm触知する。脾は触知しないが、脾濁音界は拡大している。下肢に浮腫は認めない。

33 この患者の血中で低下しているのはどれか。

- a 空腹時血糖
- b クレアチニン
- c 総ビリルビン
- d アルカリホスファターゼ
- e 総コレステロール

34 摂取を制限するのはどれか。

- a エネルギー
- b 糖質
- c 蛋白質
- d 脂肪
- e ビタミンD

次の文を読み、35、36の問いに答えよ。

58歳の男性。1か月前から下腿のむくみがあり、徐々に増悪するので来院した。

現病歴：20年前に健康診断で尿糖の陽性を指摘された。10年前に糖尿病と診断されて、経口血糖降下薬やインスリンによる治療を受けたことがあったが、3年で中断していた。最近、全身倦怠感があり、目がかすむ。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

生活歴：喫煙歴はたばこ40本/日。飲酒歴はビール大瓶2本/日。

現症：意識は清明。身長172cm、体重78kg。体温36.2℃。脈拍84/分、整。血圧162/102mmHg。心雑音はない。下腿に浮腫を認める。

検査所見：尿所見：蛋白3+、糖1+、潜血(-)。血液所見：赤血球420万、Hb13.5g/dl、Ht40%。血清生化学所見：空腹時血糖212mg/dl、HbA_{1c}8.2% (基準4.3~5.8)、総蛋白4.5g/dl、アルブミン2.2g/dl、尿素窒素13mg/dl、クレアチニン1.1mg/dl、尿酸5.1mg/dl、総コレステロール315mg/dl、Na140mEq/l、K4.2mEq/l、Cl101mEq/l、Ca7.2mg/dl、P4.0mg/dl。TSH3.2μU/ml (基準0.2~4.0)、アルドステロン15ng/dl (基準5~10)、血漿レニン活性4.2ng/ml/時間 (基準1.2~2.5)。胸部エックス線写真で心拡大を認めない。

35 浮腫の主な原因はどれか。

- a 血糖上昇
- b 心拍出量減少
- c 循環血漿量増加
- d 血管透過性亢進
- e 血漿膠質浸透圧低下

36 生活習慣の指導で正しいのはどれか。

- a 水分制限
- b 減塩食摂取
- c 高蛋白食摂取
- d ビールから日本酒への変更
- e スポーツジムでの筋肉増強運動

次の文を読み、37、38の問いに答えよ。

35歳の2回経妊、未産婦。尿糖持続のため近医から紹介されて来院した。

現病歴：現在妊娠20週。定期妊婦健康診査を受けていたが、尿糖以外、特に異常は指摘されなかった。

現症：身長160cm、体重80kg。体温36.5℃。脈拍80/分、整。血圧104/64mmHg。胸部の打聴診で異常を認めない。子宮底長18cm、腹囲95cm。胎児心拍数140/分。

内診所見：子宮は成人頭大、軟、子宮口閉鎖、展退度0%。膣分泌物は白色、少量。

検査所見：尿所見：比重1.030、蛋白(-)、糖2+、沈渣異常なし。血液所見：赤血球430万、Hb12.5g/dl、Ht41%、白血球8,600、血小板23万。血清生化学所見：空腹時血糖102mg/dl、総蛋白6.0g/dl、尿素窒素10mg/dl、クレアチニン0.7mg/dl。

37 問診で重要性が低いのはどれか。

- a 月経歴
- b 既往妊娠歴
- c 家族歴
- d 食生活
- e 妊娠前の体重

38 75gブドウ糖負荷試験で静脈血前値104mg/dl、1時間値200mg/dl、2時間値160mg/dlの結果を得た。

この妊婦でまず行うのはどれか。

- a 食事指導
- b 飲水制限
- c 運動制限
- d インスリン投与
- e 経口血糖降下薬投与

次の文を読み、39、40の問いに答えよ。

8か月の乳児。顔色不良を主訴として来院した。

現病歴：15時間前に発熱と不機嫌とに母親が気付いた。その後患児は入眠したがすぐ覚醒した。1時間前に顔色不良と元気がないことが認められた。

既往歴：BCGは接種済み。1か月前に突発性発疹に罹患している。

現症：体重8,410g。体温38.2℃。呼吸数60/分。脈拍160/分、整。顔色は不良で、顔貌は無欲様である。周囲に対する関心が乏しい。背臥位で頭部を持ち上げ前屈させると抵抗があり、同時に股関節と膝関節とが屈曲する。

検査所見：血液所見：赤血球394万、Hb10.7g/dl、白血球14,500(後骨髄球2%、好中球56%、単球7%、リンパ球35%)、血小板10万。CRP11mg/dl(基準0.3以下)。

39 この患児の診断に重要なのはどれか。

- a 大泉門の触診
- b 頸部リンパ節の触診
- c 胸部の打診
- d 腸雑音の聴診
- e 股関節の開排

40 診断に最も必要な検体はどれか。

- a 鼻汁
- b 咽頭ぬぐい液
- c 尿
- d 糞便
- e 脳脊髄液

次の文を読み、41、42の問いに答えよ。

45歳の男性。右上腕と腰背部との激痛のため救急車で搬入された。

現病歴：自転車を運転中バイクと衝突転倒し、路上に投げ出された。右上腕と腰背部とを路面に強打して立ち上がれなくなった。

既往歴：特記すべきことはない。

現症：意識は清明。身長165 cm、体重60 kg。脈拍84/分、整。血圧126/80 mmHg。右上腕は腫脹し激痛を伴っている。腰背部にも激痛がある。脳神経系は正常である。右手関節の背屈と右手指筋の伸展とがいずれも麻痺のためできないが、右手関節の掌屈と右手指筋の屈曲との筋力は正常である。表在感覚は右前腕、右手背で低下している。左上肢には神経学的異常を認めず、膀胱直腸障害はない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤沈6 mm/1時間、赤血球500万、Hb 14.8 g/dl、白血球8,000、血小板25万。骨エックス線単純写真で、右上腕骨骨幹部骨折のほか、第3、4腰椎の椎体と椎弓との骨折を認める。

41 右上肢の運動麻痺の原因部位はどれか。

- a 橋
- b 延髄
- c 頸髄
- d 胸髄
- e 末梢神経

42 下肢の神経学的所見として考えにくいのはどれか。

- a 筋力低下
- b 表在感覚低下
- c 深部感覚低下
- d 病的反射陽性
- e 深部反射減弱

次の文を読み、43、44の問いに答えよ。

75歳の女性。胸痛を主訴に来院した。

現病歴：5時間前から胸部圧迫感を自覚し、次第に増悪するため受診した。

既往歴：50歳代から高血圧と高コレステロール血症とで加療中である。72歳時に脳出血の既往があり、左半身に軽い麻痺が残っている。

現症：意識清明だが苦悶様。身長158 cm、体重62 kg。脈拍76/分、整。血圧110/72 mmHg。胸部聴診で心雑音はなく、呼吸音の異常は認めない。腹部は平坦、軟。四肢は冷たい。

検査所見：血液所見：赤血球380万、Hb 12.5 g/dl、白血球9,800、血小板16万。血清生化学所見：尿素窒素20 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST 34 単位(基準40以下)、ALT 36 単位(基準35以下)、LDH 320 単位(基準176~353)、CK 122 単位(基準10~40)。来院時の12誘導心電図(別冊No. 6A)を別に示す。

別冊
No. 6 図A

43 最も重要な検査はどれか。

- a 胸部エックス線撮影
- b 頭部CT
- c 胸部MRI
- d 冠動脈造影
- e 運動負荷心電図

44 検査中に、モニター心電図上の変化とともに意識低下を認めた。この時の心電図(別冊No. 6B)を別に示す。

とるべき処置はどれか。

- a リドカイン投与
- b エピネフリン投与
- c 硫酸アトロピン投与
- d 心マッサージ
- e 除細動

別冊
No. 6 図B

次の文を読み、45、46の問いに答えよ。

47歳の女性。乳房の腫瘍に気付いたので来院した。

現病歴：昨日、入浴後に右乳房に腫瘍を触知した。

既往歴：特記すべきことはない。

現症：意識は清明。身長155 cm、体重53 kg。体温36.7℃。脈拍72/分、整。血圧120/70 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。頸部に血管雑音はない。心雑音はない。右乳房上外側に辺縁が不整な2 cm大の腫瘍を触知する。乳癌の可能性を示唆したところ、顔面蒼白になり意識消失し、崩れ落ちるようになり前に倒れた。呼びかけに反応しない。

45 気道確保とバイタルサインの確認とをしながら、次にすべきことはどれか。

- a 人を呼ぶ。
- b 担架を探しに行く。
- c 静脈路を確保する。
- d 人工呼吸を開始する。
- e 心臓マッサージを開始する。

46 まもなく意識が回復した。脈拍80/分、整。血圧138/80 mmHg。外傷はなく、神経学的にも異常は認めない。

意識消失のエピソードに対して、次にすべきことはどれか。

- a 経過観察
- b 胸部エックス線撮影
- c 頭部単純CT
- d 脳波
- e 24時間連続心電図

次の文を読み、47、48の問いに答えよ。

48歳の男性。夜間の呼吸困難のため救急車で搬入された。

現病歴 : 4年前に狭心症と診断され、アスピリンと亜硝酸薬とを服薬していたが、半年前から中断していた。3か月前から通勤途中の駅の階段を昇るとき軽度の胸痛を感じていた。2か月前から、就眠前の安静時にも軽度の胸痛が出現するようになった。2週前の夕方、勤務中に冷汗を伴う前胸部絞扼感を感じたが、30分ほど安静にしていると軽快した。昨夜、就寝後1時間ほどで呼吸困難のため覚醒した。横になると呼吸困難が再発するので眠れず、午前3時に来院した。

既往歴 : 8年前に健康診断で糖尿病を指摘されたことがある。

現症 : 意識は清明。身長169 cm、体重68 kg。呼吸数28/分。脈拍92/分、整。血圧122/88 mmHg。頸静脈の怒張と下腿の浮腫とを認める。心雑音はない。両下肺に coarse crackles を聴取する。右季肋部に圧痛を認める。

検査所見 : 尿所見: 蛋白1+、糖1+。血液所見: 赤血球430万、Hb 14.2 g/dl、Ht 42%、白血球6,500、血小板30万。血清生化学所見: 血糖150 mg/dl、HbA_{1c} 6.8% (基準4.3~5.8)、総蛋白7.0 g/dl、尿素窒素17 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、総コレステロール204 mg/dl、トリグリセライド129 mg/dl (基準50~130)、総ビリルビン0.5 mg/dl、AST 22 単位(基準40以下)、ALT 34 単位(基準35以下)、LDH 320 単位(基準176~353)、CK 40 単位(基準10~40)、Na 148 mEq/l、K 4.6 mEq/l、Cl 103 mEq/l。

入院時の心電図(別冊No. 7)を別に示す。

別冊 No. 7 図

47 この患者の病態の原因はどれか。

- a 肺炎
- b 狭心症
- c 心筋梗塞
- d 大動脈瘤破裂
- e 解離性大動脈瘤

48 この患者にまず必要な治療薬はどれか。

- a 利尿薬
- b 亜硝酸薬
- c 血糖降下薬
- d カルシウム拮抗薬
- e ノルエピネフリン

次の文を読み、49、50の問いに答えよ。

53歳の女性。発汗、不眠および動悸を主訴に来院した。

現病歴： 1年前から時々顔面のほてりを覚え、運動もしていないのに突然汗が出るようになった。6か月前から、夜なかなか寝つけなくなり、動悸もするようになった。

既往歴： 特記すべきことはない。閉経52歳。

現症： 意識は清明。身長157cm、体重62kg。体温36.4℃。脈拍76/分、整。血圧132/78mmHg。心雑音はない。腹部は平坦で、肝・脾を触知せず、圧痛と抵抗とを認めない。下肢の浮腫は認めない。

検査所見： 尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球410万、Hb12.4g/dl、Ht36%、白血球5,300、血小板37万。血清生化学所見：空腹時血糖96mg/dl、総蛋白6.2g/dl、クレアチニン0.8mg/dl、AST28単位(基準40以下)、ALT34単位(基準35以下)。

49 最も考えられる病態はどれか。

- a 自律神経の障害
- b 脳の虚血
- c 肝機能の異常
- d 腎機能の低下
- e 耐糖能の低下

50 この患者に合併しやすいのはどれか。

- a 気管支喘息
- b 十二指腸潰瘍
- c 尿路結石
- d 高脂血症
- e 甲状腺機能低下症

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)